

「胃癌の最新情報と鍼灸師の注意すべき事項」

がん研究会有明病院 消化器外科 本多 通孝

わが国における死因順位は 1981 年以降、悪性新生物が第一となり、その後一貫して増加傾向にあります。現在では死因の 32%（約年間 35 万人）を占め、第 2 位の心疾患（16%）の 2 倍となっています。悪性新生物の大部分は「がん」であり、その中でも 1990 年代までの死因第一位は男女ともに胃がんでした。わが国における「がん」との戦いは、主に胃がんと戦いでもありました。その甲斐もあってか、胃がんの死亡者数は年々減少傾向にあり、現在の死因第 1 位は肺がんになっています。また最近では疾病構造も変化してきており、欧米のように乳がんや前立腺がん、大腸がんが増えてきており、10 年前と比べて、がん治療の戦略は大きな変化がありました。

胃がんの基本的な治療戦略は、外科的に病巣を切除することにあります。どこまでをどのように切除したらよいか、という手術の技術的命題について外科医は 50 年以上かけて追及してきた結果、現在のように安全に手術が行えるようになりました。一方で乳がんは、ある程度早い段階で発見されたとしても、治療の主体は抗がん剤です。病巣の切除は主に診断をつける目的で行われます。わが国と欧米では、がん治療に対するイメージや考え方が大きく異なりますが、それは国民の疾病構造の違いによるものだと思います。これらの相違は、かつてはわが国と欧米との治療内容に良くも悪くも格差を生じさせましたが、近年ではたくさんの臨床試験の成果を通じて、治療効果の検証・診療の見直しがされてきました。

本学術講習会では、とくに胃がん治療の歴史的な変遷を示しながら、①がんの特徴・進行のしかた、②日本のがん治療の特徴、③最近の進歩と臨床試験の意義について、がん治療現場の最前線からの情報提供を題材に、一緒に考えてみたいと思います。